

翻刻 京都大学附属図書館蔵定家本六條修理大夫集

内 田 徹

京都大学附属図書館蔵六條修理大夫集（函架番号4・23・ロ・7）は宮内省図書寮旧蔵、一九一四（大正三）年京都帝国大学へ寄贈。その所在等については既に『私家集大成中古II』頭季集解題に、上野理氏により報告されている。本書は靈元天皇宸筆外題を持つ旧図書寮本であり、寛文〓元禄期に靈元天皇の御意図による能筆の公卿・殿上人を動員して実施された、禁裏本新写補充のうちの一写本であると推定される。本文は定家流の筆致で書写されており、本書は定家筆本の忠実な臨写と推定される。さらにいえば、当時定家流の書風を公示し得たのは上冷泉家の当主のみであったと思われるので、本書は当時の上冷泉家の当主の書写にかかり、同家蔵の定家筆本を底本とすると推定できる。現在、その定家筆本の所在は不明であるが、本書はその形態を留めている点、貴重であり、ここに翻刻することとする。

本書は縦十六・五cm、横十五・二cmの枳型列帖装一冊本、ただし現在は一部改装されている。紺の内巻り鳥の子表紙中央に「六條修理大夫集」と靈元天皇宸筆と推定される外題。内題はない。

本文料紙は鳥の子紙。一面八〓十二行、和歌一首二行、詞書き二字下りに書写。一部墨減は別筆であるが、他は集付、書入を含めすべて同筆である。

凡例

- 一、用字はすべて通行字体によった。
- 一、底本に付された集付、傍書、ミセケチなどはすべてそのままとした。
- 一、底本の記載形式に関わりなく、詞書きは二字下げ、左注は三字下げにしたが、原態のままとした箇所もある。改行は頁数の関係により一行に続け、余る場合は改行した。ただし上句と下句の間には一字分空白を設けた。
- 一、丁移りは「」によって示し、その丁の裏面の本文の終りに丁数を記した。
- 一、判読不能な文字は□で示した。
- 一、重ね書きで下の文字が判読可能な場合は下の文字を（）

に入れ本行に入れ、判読不能な場合は□で示した。また重書した文字で判読可能なものは右傍に掲げた。

一、底本に虫損はみられないが、親本の虫損をそのまま模写している部分がある。その箇所では判読不能の場合は△で示した。

一、校訂者の加えた注記は()に入れて示した。

一、歌頭に全体の通し番号をつけ、その下に『私家集大成』本頭季集(底本は神宮文庫本)の番号を○に入れて示した。ただし本文にはかなりの異同がある。

六條修理大夫集(外題)

承暦四年殿上歌合

1(1) たつねこぬさきにもちらて山さくら 見るおりにしもゆきとふるらむ

頭中将家歌合

2(2) 山たかみおのへにさけるさくら花 ちりなはくものはるゝとや見む

3(3) 二位の白河のさうしあはせの歌
金 しくれつゝかつちる山のもみちはを いかにくよのあらしなるらむ

とをく郭公をきくといふ心を

4(4) 山ひこのこたへさりせば郭公 ほかになくねをいかてきかまし

郁秀門院根合歌

5(5) さりとともとおもふはかりやわかこひの いのちをかくるたのみなるらん

遅齡如松題

6(6) ふたはなるまつをひきうへてたれもみな おなしちとせのかけをこそ(一)まで

毎朝臨菊

7(7) きくのはなさきぬるときはめかれせず いくあさつゆのおきてみるらん

鳥(けずり跡) 前段 合に越前守家保に□歌二首左方萩不入

8(8) はきかはなるもちらぬもおしなへて さなからをしき秋のゝへかな すゝき

9(9) 秋風になひくすゝきとしりながら いくたひそらにたちとまららん
おなしせんさいあはせにいなはの(一)かみにかはりてみきかたにたてまつるうた二首

おきいらす

10(10) あきの上は人まつとしもなければ おきのはかせにおとろかれつゝ

きくいる

11(11) ちとせまできみかつむへきゝくなれば 露もあたにはをかしとそおもふ

てん上にてちとりといふ題をよませ給した(一)

12 (12) おきつ風ぶきあけのうらやさむからん なみたちさはきちと
りなくなり

こひをなこそそのせきによせてよみしに

13 (13) あつまちなこそそのせきはよとよみに つれなき人の心なり
けり

歌合に

14 (14) しきのふすかりたにたてるいなくきの いなとは人のいはす
もあらなん

人／＼のあめのうちの野花と「いふたいをよみしに

15 (15) あめふれはおもひこそやれつゆをたに おもけにみえしまの
よむらはき

三条のたいりにわたらせ給てはしめてうたよませたまひ

しに源花おほくの春をちきるといふたいを

16 (16) きみかよのちとせのはるにさくら花 これやはしめのにほひ
なるらん

かよひはへりけるおとこのかれ／＼に「三」なりはへり

けるを女いかゝいひやりたりけむおとことかくいひてい
たうなうらみそなといひをこそせたりしにその女にかはり
て

17 (17) なにしかは人もうらみむなつひきの いかよりける身こそ
つられ

ある六位の二位の御もとに内のでん上をまうしけるかと
しころになりけれとゆるされさりけるにろうさうを「
もとめたまふときよてこの六位ろうさうをたてまつると

18 (18) くものうへをよそののみきくみにしあれば「みどりのそても
なに／＼かはせむ

をこなひするほとなりこの返事せよとのたまひしかは

19 (19) よそののみおもはさらなんくもの上を つひはみとりのそて
そかさねん

すみよしかむぬしくにもと内にまさする事ありしを宣

旨をそくよたるとてまたのとしの二「四月にいひをこ
せたりし

20 (20) くものうへは月こそさやにさえわたれ またとよこほること
やなになり

返し

21 (21) とよこほることはなけれどすみよしの まつこゝろにやひさ
しかるらん

みかとおりゐさせたまひてのち大井に御幸せさせ給て落

22 (22) 金大井河のせきのおとのなかりせは もみしをしけるわたりと
やみむ

はりにまにくたりてはへりしにすわうの内侍といふ人花の

23 (23) おほつかなみやこのさくらとにほふにも うら風はやきわた
りいかにそ

さかりもすぎなんとするにのほらぬかといひて

24 (24) みやこにもはなのにほひはかはらねと いひあはせつゝみる
かへし

人そなき

院とはとのおはしましにてん上ひとつれくし
かりてひことにうた」(五七)よまむとて野花露しけしとい
ふたいを

25 (29) うつらなくあたのおほのまぐすはら いくよのつゆにむす
ほれぬらん
のゝ花衣にゝほふ

26 (26) みれとあかぬとほりののをのゝはきかはな そてにうつれるか
さへなつかし
田家秋興

27 (27) 風はやみなひくいなはの^はのうへに いかてをくらん秋夜のつ
き」
行路秋花

28 (28) きりはれぬをのゝはきはらさきにけり ゆきかふ人のそてに
ほふまで

二月廿二日京こく殿にこかうありしにまたのひ花をもて
あそふといふたいをよまれしに

29 (29) さくららはなにほふさかりのやとなれば なほをりてこそみま
くほしけれ
六条院にて落花入簾といふたいをよませたまひしに」

(六)
30 (30) さくらはなこすのまとをりちるからに ちりさへけふははら
はてそみる

はないけのみつにうつるといふたいをとほ殿ましまにて
人くよみしに

31 (31) しらなみのたつかとそみるいけ水に しつえをひてゝさける
さくらは
かへるかり

32 (32) ことつてんひとまつらむはるかすみ たなひくそらにかへ
るかりかね

33 (33) ちりかゝるほそたにかはそやまさくら たつぬる人のしるへ
なりける
水によりて山花をしるといふ題を人くよみしに」

34 (34) もろともにはあせねとしたはるゝ こゝろはきみにをく
れさりけり
といひかけしかは返し」(七)

35 (35) こゝろをおなしみちにはたくふとも なをすみよしのきし
もせしかし
たちはなのなかもとかやりとひとつへたてたるところに
まうてきて人とものかたりなとしてかくなむとつけてか
へりしかは

36 (36) すまのうらのうらみやせましたかさこの まつにをとせすを
きつしらなみ
たひのやとりのゆきといふ心をよみしに

37 (37) まつかねにおはなかりしきよもすから」 かたしくそてに雪
はふりつゝ

こひ

38 (38) いはしろののなかのまつにあらねとも こひもとしふる物に

そありける

としころはへりし女方のあまになりてはへるにきぬとら

すとして

39 (39) からころもたえすきてみよいまはとて のりの道にはいりに

けれとも

かへし

40 (40) いまはとてそむく身なれとから衣 きてみるときはきみそう

れしき」(八)

人く春の心花にありといふころをよみはへりしに

41 (41) 心みにさてもやはるはうれしきと はなよきとしにあふよし

もかな

とはとのに御かたゝかへに正月十日行かうありしつとめ

てゆきのふりたりしに内侍すわうさふらふときよてつか

はしたりし

42 (42) あらたまのはるのはしめにふるゆきは いつしかさけるはな

かとそみる

かへし」

43 (43) すむ人もひさしきやとはちとせふる みゆきにゆきのつもる

なりけり

依月夏涼

44 (44) なかむ^{是夜}れはすしかりけりなつのよの 月のかつらに風や

ふくらん

雨中閑居

45 (45) さみたれにとふ人もなしやまさとは のきのしつくのおとは

かりして

遠村早苗

46 (46) さとよをみやまたのさなへひきつれて いそきてみゆるたこ

のけしきか

逐日草液」(九)

47 (47) まくすはらしけるのへのけしきかな としはかすへのみえ

すなりゆく

瞿麦満庭

48 (48) わかやとはにはもまかきもをしなへて いまさかりなりなて

しこのはな

蘆橘暮薫

49 (49) のきちかくはなたちはなのにはふかは たそかれときそおほ

めかれける

聞郭公恋掃

50 (50) ほとよきすこゑあかなくにたつねきて いくりのもりにいく

よへぬらん

照射及暁」

51 (51) ともせともこよひもあけぬいたつらに あふさかやまもかひ

なかりけり

初恋

52 (52) わかこひはふかきみやまのまつなれや 人にしられてとしの

へゆけは

遇不遇恋

53 おもひきやまたあふ事のかたきしに すまのうらにてしはた
るへしと
こひ

54 おほそらはこひしき人のなにならん なかめてのみもすくす
ころ哉」(十)

卯花処々

55 (55) かはのへにむら／＼さける卯花は せゝのしらなみたつかと
そみる

逐夜待郭公

56 (56) さてもなをねていくよにかなりぬらん やまほとゝきすいま
やきなくと

待客聞郭公

57 (57) もろともにかましましものをほとゝきす たのめし人のはやき
まさなむ

樹陰留客

58 (58) あふさかのせきならねともなつやまの このしたかけも人は
とめけり」

正月十日ころよりわざとなけれと風のたえかたきにおろ
加本こめ解
しめて春のゆくへもしらすしてありしに二月廿日ころに
かくすしせしにりう源あざりかこもりそうにてありしに
こそうへたりしきくらの花さきたりしをみてあざりにや
りし

59 (59) はなみむとねこしにうへしわかさくら さきにけらしもかせ

なふきこ□そ

60 (60) ことしよりきみかゝさしのはななれは ^{かた}ちとせをへてもちら
しとそ思

二月廿日ころほひすわうのないしいふ事ありてせうそこ
いひたりしかへりことに正月十日ころより風のわりなき
にさしいつる事もなくておろしこめて春のゆくゑもしら
てなむあるなとかとはぬと申たりしかはまたをししかへし
て

61 (61) みにしみていとふかせとはしらすして はなによりともおも
ひけるかな」
返し

62 (62) あをやきのいとふにみたるはる風も いかにくるしきものと
かはしる

63 (63) ^金まつかねにころもかたしきよもすから なかむる月をいもみ
るらんか

別当のとのゐる所に人／＼月前旅情といふ題よみしに

64 (64) ことしよりえたさしそむるまつのきの」(十二) はなのをり
／＼きみそみるへき

鳥羽殿此寝殿にはしめてわたらせ給しに松契返年題

七条にて人／＼あそひしついでによみしこひのうた

65 (65) としもへぬつくまの神にことよせて なへのかすにも人のい
れなむ

おなしところにて人／＼梅告春近題并恋

66 (ゆきのうちにつほみにけりなむめのはな はるあけかたになりやしぬらん

67 (7) としまよりとわたるふねのともやかた やかたつれなきいも
か心か」

68 (68) 金 正月ゆきのふりたりしかは新大納言のもとにきこえし
あらたまのとしのはしめにふりしけは づつゆきとこそいふ
へかりけれ

69 (69) あさとあけてはるのこすゑの雪みれは はつ花ともやいふへ
かるらん

藤大納言のとはのとのめところにて人くあめのうちの
ほととぎすまた恋のうたよみしに

70 (70) さみたれにいまきのをかほととぎす」(十三) しのくにぬれ
てなきわたるなり

恋 71 (71) まつのきのねにあらはれぬわか恋は ひとの心のかたきしな
れは

右近のむまはに人くほととぎすたつぬとて

72 (72) ほととぎすこゑあかなくにほととぎす ことふるさとそうれ
しかりける

そのついでに人くこひをよみしに

73 (73) うらもなくいまはひとつにわきもこか あひみそめけんくも
とりのあや」

うるふ五月のついたちのひ新大納言のもとにきこえし
74 (74) なをきなけいまた五月そほととぎす おもひたかへてやまへ
かへるな

返し大納言
75 (75) またさらにはつねとそまつほととぎす おなしさつきも月し
かはれは

おなしうたをさきの右衛門佐もともしかもにつかはし
たりし返うた

76 (76) つけさらはこそにならひてほととぎす」(十四) ほととぎすやま
にいりやしなまし

うちにみやくにうたよむときこゆる女方ともにけさう
のこゝろのうたをめてそのきこえある殿上人かむたち
めにたひてかへしたてまつれとおほせられしかは

一宮のきのきみ
77 (77) うらみかねさよの衣をひとしれす おもひかへせとなくさま
ぬかな

かへし
78 (78) ひたすらにさよのころもにことよせて うるなは人をうらみ
さらなむ」

十一月はつかころに平等院のあさりかけのむまをくくり
て

79 (79) またしきにあふさかやまにたちいつる この月かけのこまは
あらしを

かへし

80 (80) もりこすはいかてかみましあふさかの^は この月かけのこまそ
うれしき

はるかに月をおもふという事^{たい}を

81 (81) こゝろあらはこよひの月をからくにの 人もなかめてあかさ

ゝらめや

月はたひの中のともいふ題を」(十五)

82 (82) ふなてしてすまのうらわによもすから 月のひかりのさすを

こそみれ

松廻年友

83 (83) ちとせまですむへきやとのためしにと いはねのこ松けふそ

うへつる

秋花催興

84 (84) よとゝもにのへに心やあくかれむ もとあらのはきのはなし

ちらすは

もみち

85 (85) くれなゐにふかくそみゆるふすまのひきてのやまのみね

のもみちは」

恋

86 (86) いはしらのゝなかのたてるむすひまつ いつとくへしとみえ

ぬきみかな

おとせんさぎのさいゐんにわたりてさふらひ給しにく

すたまたてまつるとて

87 (87) けふことたつねてひけるあやめくさ ねなかききみかよは

ひとも哉

かへしたれにかありけん

88 (88) あやめくさたまのうてなにひきかけて ねなかきためしきみ

そみるへき」(十六)

ゆきむねのさきのひやうゑのすけのもと(に)りあふき

かみこひにをこせたりしにれいならぬ事ありときくはい

かにとありしかはかみやりしにかく

89 (89) なをさりの事のはをたにきかましや あふきの風のたよりな

らすは

かへし

90 (90) なをさりの風のたよりとおもふなよ このかみくもかけて

ちかはむ

91 (91) わきもこにいかてしらせんそなれきの」 えたにもいはてと

しのへぬるを

中宮のほりかはの院つくりてわたりたまひて歌ありしに

松契廻年

92 (92) よろつよのまつのしけるやとなれば ちとせのみとはおも

はさらなむ

院にて山家卯花題

93 (93) かよひこしゝはのかとたちみえぬまで うのはなさけるみや

まへのさと

人のこゆみをせちにこひしかはをしみかねて」(十七)

94 (94) ちりたかきゝのせきもりかたつかゆみ 心よわくもはられぬ

るかな

返し

95 (95) いまよりはをしてをいはむたつかゆみ かくおもはずにはら
れぬるかな

暮山落葉

96 (96) くれぬとてかつちるやまのみみちはに あらしふくよとみて
やかへらむ

恋

97 (97) しるらめやをとにのみきくもみちはにかつらきの 山のみね
ともこひしき物を

月照菊花

98 (98) いかはかりくまなきそらの月なれや やへさくはなのかすみ
ゆるまで

落葉埋橋并恋

99 (99) をくらやまみねのあらしのふくからに たにのかけはしもみ
ちしにけり

100 (100) こまにをくうつし心もなきまで に こひわたるとは人しるら
めや

月

101 (101) みかさやまさしいつる月のくまもなく ひかりのとけきよに
もあるかな」十九

山家待花

102 (102) あしひきのかたやまきしにいゑぬして みねのさくららの花ま
つわれは

中院にて初和歌見花延輪題

103 (103) なかむれはおのゝえさへそくちぬへき 花こそちよのためし
なりけれ

江中納言のもとに申へきことありてまかりたりしにさく
らのめてたかりしをみて

104 (104) きみのみそたつねてみけるさくら花」をらまほしくもおほ
ゆるかな

又日かへし

105 (105) はる事にきつみよかしさくら花 はなさかりあるやとよい
はせん

二月はかり於円融院翫花こゝろ人よみしに

106 (106) ぬしなくてあれのみまさるやまさにと さかりとみゆるはな
さくらかな

堀河院に内わたらせおはしまして和歌ありしに竹不改色

題」(十九)

107 (107) すめらきのなかれもたえすかはたけの みとりのいろもいろ
つくまで

閏二月ありし年三月廿日あまりのころほひに待郭公和歌
一首とかきて平等院のあさりのもとより

108 (108) きさらきのそはさらませはほととぎす これはうつきとさと
なれなまし

かへし

109 (109) ひかすにてほとをしりくるほととぎす は□くる日といか
てきくむ

長治二年三月四日行幸して三日おはしましつたひ池上花

題

(二行分空白)

110 (110) きしちかくにはふさくらのはなみれば しつえやいけのかさ
しなるらん

春日にまうてたりしに□殿院法眼の房に宿たりしに又の
日かへらむとせしにさげなとたうへなとせしてある僧の
よめりし」(二十)

111 (111) みかさやまこたかき松のなかれとそ きみをはたのむちよの
ためしに
かへし

112 (112) みかさやま松のなたての身なれとも ちよのためしにひかれ
ぬるかな
正月に人のうつちをつかはしたりしにかきつけたりしう

113 (113) みかさやまさしもはなれぬきみにけふ いのりのつえをたて
まつる哉
かへし」

114 (114) いのりけるつえのたよりにみかさやま ちとせのさかもさし
こえぬへし
中納言のひめきみの御もとにさきのさい宮より正月七日

115 (115) とにかくにこゝろもとなき子日かな まつやわかなをつみに
ゆかまし
ねのひにあたりたりしにおほせられたりし
かはりてかへし

116 (116) しらすやは子日のまつにひきつれて ちとせつむへきわかな
よりとは」(二十一)

(半丁空白)
117 (117) いろもかもむつまじきかなきくの花 ちとせの秋のかさしと
思へは

月照紅葉
118 (120) うすくこきもみちのいろのみゆるまで くまなくてらすよは
の月かな
こひ

119 (121) おもひあまりおつるなみたをしのふれと をさふるそてのい
ろにいてぬる

120 (122) いはしろのよなかにたてるむすひまつ とくへくもなききみ
か心か」(二十二)

121 (123) なみかくるきしのひたひのそなれきの そなれていもとぬる
よしも哉
依花忘家

122 (124) よとよものにのへにてとしやすくさまし ときはにさけるさく
らなりせば
つくしへくたらむとせしに永縁僧都鹿毛なるむまをよこ
せて

123 (125) たちわかれはるかにいきのまつなれば こひしかるへきちよ
のかけかな
かへし

124 (126) なみまわけはるかにいきのまつの身も」こゝろつくしにこ

ひしかるへき

和歌合桜

125 (127) ぶきちらず風なかりせはさくら花 にほふひかすのほとはみ

てまし

花無折処

126 (128) いつこともわかぬさくらはなれは たつねいたらぬくま

のなき哉

十月十日ころになるまできくさかさりしに真尊阿闍梨の

もとよりいとおほきなるくきをよこせてえたにゆひ

(二十三)つけたりし

127 (129) ふたはよりゆくすゑまでにさかへつゝ これもやへさくしら

きくのはな

かへし

128 (130) よろつよのかさしとおもへはとしことに とへとぞ思しらき

くのはな

くら人のしゅうのゑちこのかみのもとにわたりしひふみ

に

129 (131) もろともにもちよへむほとを人しれす くれゆくそらをまつに

てそゆくしる

かへし

130 (132) ちとせへむほとはまことにしりぬへし くれゆくそらをま

つとし けは

たいこの座主のもとよりこのほとなんの花のさかりなると

ありしかは人くさそひてまかりたりしに

131 (133) さくらにはな花の心もこゝろみむ このはるかせはふかすもあ

らなむ

東山観音寺といふところにて藤花いとめてたかりしに人

くふちならひに恋よみしに

132 (134) ひたすらにいまもむかしもわすられて 心にかゝるふちのは

なかな (二十四)

133 (135) しるらめやをとにのみきくかつらきの やまのみねともこひ

わたるとは

このうたをきよてさきのひやうゑのすけゆきむねのきみ

のもとより

134 (136) ふちのはなみぬよそ人の心にも きくにつけてそまつかゝり

ける

かへし

135 (137) ふちのはなこゝろにかゝるものならば たつねてまつもなと

かみさらん

前木工頭俊頼朝臣 山花みに人くさそひてまかり

りけりとぎよて

136 (138) はる風にあらぬ身なれとさくら花 たつぬる人にいとはれに

けり

返し

137 (139) きみか身ははなふくへしとみる物を かせならずともおもひ

けるかな

人くつれくかりて恋のうたよみしに

138 (140) あしひきのやまかへりなるはしたかの さもみえかたきこひ

もするかな」(二十五)

俊忠宰相家にて人／＼十首恋歌よみしに

うらなふ恋

139 (141) 恋／＼につけのをくしのうらをして つれなく人をなをたの

むかな

きてのとまらぬ恋

140 (142) たまつしまきしうつなみのたちかへり せないてましぬなこ

りこひしき

ちか事の恋

141 (143) うれしくはのちのこゝろ 〔△〕神もきけ」 ひくしめなはのた

えし 〔△〕思

ふしなからまことなき恋

142 (144) ことならばふす名もたちぬひたすらに うちもとけなんいも

かしたひも

いのれとあはぬ恋

143 (145) はふりこかいのりを神やかかけさらむ 我にしきゝをとる人も

なき

ついでうのこひ

144 (146) 心をはいかにもきみにつくせとも くものよそにてとしをふ

るかな」(二十六)

いつはりにてあはぬこひ

145 (147) こひしさをなにくつつけてかなくさめん たのめし月ひすきぬ

おもへは

たちきゝの恋

146 (148) わきもこかこゑたちきゝしからころも そのよのつゆにそて

はぬれにき

いやしきをいとふこひ

147 (149) くもとのあやしかりける身なれとも をもひそめてし心は

やまし

かたけれとゝくるこひ」

148 (150) いかばかりみとのまきはひちきりありて おやのいさめにさ

はらさるらん

於七条亭人／＼桜歌十首よみしに

149 (151) いまはゝやさきにははなんさくら花 もすのくさくきかくろ

へにけり

150 (152) つねよりもとけくにほへさくらはな 春くはゝれるとしの

しるしに

151 (153) さくらはななきぬるときはよしのやま たちものほらぬみね

のしらくも」(二十七)

152 (154) さくらはなにははぬ春はなけれども みるたひことにめつら

しきかな

153 (155) しらくもとみゆるさくらのにはひかな たかすむやとのこす

えなるらん

154 (156) かすみたつくらまのやまのうすさくら てふりをしてなをり

そわつらふ

155 (157) めかれせすなかめてをらむさくらはな やました風にちりも

こそすれ

156 (158) ちりつもあるかゝみのやまのさくら花 をもりけにこそよるも
みえけれ」

157 (159) うくひすのはなふみ △ くやまさとは ころもてさえぬゆき
そふりける

158 (160) はる風のふくにつけてや山さくら となりのまつに花はかす
らん

於大井河葉落水紅并恋

159 (161) をくらやまみねのあらしのふくからに となせのたきそもみ
ちしにける

160 (162) としひさにゆわたのきぬをとりして、 神にそまつるいもに
あはむため

雲居寺聖人百種物供養に □ 唐蒙 二十人 錦で相具和歌由いひ
たりしに

161 (163) はるかぜのふきくるからにしきたえの まくらうへにはな
のちるらん

春情在花題

162 (164) さくらはなにははさりせはなにしかは 春くる事のうれしか
らまし

桂山庄にて暮山郭公并恋

163 (165) ゆふつくひいるさのやまにとき生まれ をりはへてなくほと
ゝきす哉

164 (166) おもひかね恋わすれかひひろへとも そてぬれまさるおきつ
しまもり」

水辺芦葉題

165 (167) みわたせはあしはをしなみしけりあひて みちたつくしほ
りえこくふね

166 (168) 註 内府於東三条夏夜月并悪人恋
くるゝかとみるほともなくあけにけり をしみもあえぬなつ
のよの月

167 (169) ことのはをたのまさりせはとしふとも 人をつらしと思さら
まし

長実朝臣於八条亭掃路落葉并恋」二十九

168 (170) いつらいもはくものふま 如本ふる歌 みたのむらん みちさまたけにちる
もみちかな

169 (171) わきもこかはきそのほそちにすまはねと などあふ事のかた
きしならん

同亭霞并恋

170 (172) ゆきふ え (れ) ぬひらのたかねもはるくれは そこともしら
すかすみたなひく

171 (173) いかにせんのさはにおふるまるすけの まろすけもなきこひ
にけぬへし

曉尋花」

172 (174) ゆめさめていそきてきつるやまさくら あさふく風のたゝぬ
さぎにと

同日晚景恋

173 (175) とき生まれこひまさりけりいりひさす やまのはひともなか
めするゆめ

永久四年四月四日於鳥羽殿北面和歌合ありしに 卯花

郭公 昌蒲 早苗 恋

174 (176) うのはなのさくにつけてや山さとは 夏のころもおもひたつらん」(三十一)

つらん」(三十一)

175 (177) みやまいてゝまたさとなれぬほとゝきす たひのそらなる

ねをやなくらん

176 (178) けふことにたもにかくるあやめくさ ちよのさ月はきみか

まに〜

177 (179) たねまきしわたのいねやおいぬらん しつ心なくみゆるさをとめ

をとめ

178 (180) 恋しなん事をそいまはなけかるゝ つひはあふ身となりもこそすれ

こそすれ

有堀川院百首不書写(三十一丁表左上隅に筆写)

人〜 欺冬并船中恋云題よみしに」

179 (281) わかやとになをほりそえむ山ふきの 花のをりにそ人もとひける

ける

180 (282) つく〜とおもひあかしにふねとめて みやこのかたそなかめられける

められける

希聞郭公并恋

181 (283) ほとゝきすやそ山までにたつねきて たゝひとこえはきくへ

き物を

182 (284) いもかゝとわれすきゆかんいてゝみよ こひにやつれてなれるすかたを

るすかたを

新中将渡中院初祝和歌鶴契退年」(三十一)

183 (285) むれてゐるたつのけしきにみゆるかな ちとせすむへきやとのいけ水

のいけ水

新中将家和歌合郭公五月雨恋

184 (286) さつきやみくらふのやまのほとゝきす こえはさやけき物に

そありける

185 (287) さみたれにあさかのぬまの花かつみ そのたまもとなりやしぬらん

しぬらん

186 (288) よとゝもにゆくかたもなき心かな 恋はみちなきものにそありける

りける」

未聞郭公并共有憚恋

187 (289) なつころもたちぎるひよりけふまでに まつにきなかなぬほとゝきすかな

ゝきすかな

188 (290) かたいたのおもひみたるゝころなれや ことつけすともあはまし物(や)

まし物(や)

暁天水鶏并寄月恋

189 (291) またしいまはやこゑのとり(の) なきぬなり なにおとろか

すくゝひなゝらん

190 (292) ふきいたのわれてもかくる月かけ(の) こひしき人と思は

ましかは」(三十二)

海路郭公并寄山恋

191 (293) けふもなをふなてもうしほとゝきす こゑたかさこにたえ

すなきけり

192 (294) わきもこにいまはあふ身と思へとも 人めもるやまくるしか
りけり

さみたれのはれまなくつれ／＼に侍りしにつねに申かよ
はす人／＼のをとなはさりしかはさきのもくのかみとし
よりさきの兵衛のすけあきなかのきみのもとにおなし事
をかくいひつかはし」たりし

なにことかものせさせ給らんきこえさせてみつかきのいとひ
さしくなりはへりにけるかな

あけゆけはふたみのうらのうらめしく／＼れゆけはさみた
れのそらのいと／＼おほつかなき事をおほ井かはにおとす
いかたのいかなる事き／＼給へるにかかくかくもとりのあ
とやめられはへりてそらゆくとりのはへるかな」(三十三)
193 (295) さみたれのそらをなかめてすこせとも たえておとせぬほと
／＼きすかな

さきのひやうゑのすけ

かうはしき御をとつれはてのまゐあしのふまむところな
くおほえずなんそも／＼さ／＼かにのいとむつかしく心の
そらもさみたれの月なきほとはまことにみつかきのひさ
しくおとはのかはのおとつれまいらせぬ」事をなむかし
こまり申

194 (296) ほと／＼きすのきのしづくにおとなは／＼ をとせぬうらみたれ
もせましや

さきのもくのかみ

さみたれのはれまなきにつけてもおもひかけすおほしい

てけることをうれしきなみた衣のそてにかゝりける身の
ほとのおもた／＼しきをしらつゆのしらさりけるもをきと
ころなき心ちしてもとのしつくとなりはてん事を」(三十四)

さへをしまかいそのはまちとりひさしくもなからへ
はやとおほけなきことはしきしまの山とみことのおそひ
むしろには猶ちりあちのかすまへさせ給へとこゝろのう
ちにおも(へ)ま(へ)る事をおほそらにあらはれてか
きつらねさせ給へるかりのたまつさをひらくにつけても
たもとのせはきうき身さへかすそふ(あ)のありさまを」
をしはからせ給へきにや

195 (297) ほと／＼きすなけきのもとにあかすして きみかまつをはすき
にける哉

水風晚来

196 (298) ゆふつくよすふし(い)なけれとも しかのうらかせす／＼
しかりけり

庭樹曛日并恋

197 (299) みな月のてるひといへとわかやとの ならのはかけはす／＼し
かりけり

198 (300) はこねなるころのにくきさにこよかに」(三十五) つれなき人
をみるよしもかな

ひやうゑのかみのいゑのうたあはせになつのかせ
199 (301) なつころもすその／＼くさはふく風に をもひもあえずしかや
なくらむ

よかは

200 (302) ぬはたまのよかはにとすかゝり火は さはしるあゆのしる
へなりけり

なつのこひ

201 (303) つらきをもうきをもいまは思あまり たうつせみのねをの
みそなく

いづみによするこひ

202 (304) つれもなき人もろにてもたゆく むすふいつみと思はま
しかは

たなはた人／＼のよみしに

203 (305) あまのかはたまはしいそきわたさなむ あさせたとるもよの
ふけゆくに

月為秋友

204 (306) いつるよりいるやまのはのふもとまで 心をそやる秋のよの
月

九月十三夜詠月和歌并恋」(三十二) 各一首

205 (307) 秋はいまはなかもいまはすきぬるに さかりとみゆるよは
の月かな

寄処恋

206 (308) いかにせんわかたちぬれぬわきもこに あはてのもりのきの
しらつゆに

月照旅宿并恋

207 (309) いさゝめにこそはぬ月ともろともに たびのいをりに夜をあ
かすかな

208 (310) たまもかるからかのしまのからき哉 いもにあふへきかたの

なけれは」

詣住吉社

209 (311) そのかみにかさしにしめしすみよしの まつのしつえはなみ
そをりくる

残菊留秋并恋

210 (312) ふゆにいまはなりぬときげとたのまれす ときそみゆるしら
きくのはな

211 (313) くれたけのよことにいもをいさなへと ふしみることにあり
かたきかな

十二月廿日ころにゆきのいとたくふりたりしつとめて
前木工頭俊頼のきみ前兵衛佐頭仲」(三十七) かもとにおな

212 (314) ゆきふれはふま(て)くをしきにはのおもを たつねぬ人そ
うれしかりける

としよりのきみかゝへり

213 (315) わかこゝろゆきけのそらにかよへとも しらざりけりなあと
しなけれは

あきなかのきみ

214 (316) 人はいさふまよくをしきゆきなれと たつねてとふはうれし
き物を

山寒花遅并恋

215 (317) よしのやまはるはなかはにすぎぬれと」 雪きえやらて花さ
かぬかも

216 (318) まとりすむうなでのもりのうなたれて ねをのみそなく人の

つらさに

於桂山庄庭花續殘并恋催旧意題

217 (319) さくらばはなはるはのなかにちりのこる こすえやはるのとまり

なるらん

218 (320) おもひいでよあまのかこやまよそにのみ きよわたらんとい

つかちきりし

同山庄にて花并恋人くよみしに」(三十八)

219 (321) このもとにこころもかたしたひねせん はなちるさとよみて

やかへらん

220 (322) もしほやくあまをとめらかあさころも あさましきまで人の

つれなき

土左守渡播磨守行日歌とこひたりしかは

221 (323) よろつよをちきりはしむるけふなれは くるよさへこそきひ

しかりけれ

人々く歎冬藏橋并恋題をよみし

222 (324) かよひこしあてのいはよしたるとまで」ところもさらすさ

けるやまふき

223 (325) わかせこかまさまきぬときはうちなけき ひとりありあけの月

をこそみれ

平等院僧正講結願日人々く心宿草庵題を

224 (326) かとのとのくさのいをりにやとりしてて わか身のほとをつ

いにしるかな

雨中郭公并恋

225 (327) さみたれにしつくのやまのほとよます しのよにぬれてさよ

なかになく」(三十九)

226 (328) せきもりかゆみにきるてふつききのの つきせぬこひにわれ

おとろへぬ

詠廬橋蕪風和歌

227 (329) ゆふつくよ花たちはなにふく風を たかそてふるとをもひけ

るかな

たのめてこぬ恋

228 (330) ちきりをきしほとはすきぬと思へとも まつとはいはしとし

もこそふれ

待聞郭公并恋

229 (331) なつころもたちきしひよりほとよます ぬるよもなしにいま

そなくなる」

230 (332) よとよもになみこすいそのそなきの しつえやこひのころも

なるらん

草花告秋題院人々く

231 (333) つゆふすふ秋にはよやくなりにけり あさちか花のうつろふ

みれば

暁知涼并恋

232 (334) 秋風やよやたちぬらんゆめさめて たもとすよしくなりもゆ

くかな

233 (335) こひをしてとしのへぬるにおみなへし うらやましくもむす

ふつゆかな」(四十)

月不挾処并契今夜恋

234 (336) しはのいをたまのうてなもそらはれて おなし心にすめる

月かな

235

(337) いつとなく思しよりもなか／＼に くれゆくそらをまつにけぬへし

さきのもくのかみとしよりのきみいせにくたりてのちひさしくをともせさりしにかくなむいひをこせたりし

ひなのわかれによるつおとろへはてゝおほつかなきおほよとのつねにもせ」させ給ちふねのよるひるはなみの心にかげなから月日のすきにける事もなげきのもりのときはなるうへにたきゝをつめるうれへは身にそへるかけのことくにしてすゝかのせきにもふりすてられすしふく山をもすへ(し)にこえにければたけのみやこにたひねしてよゝのふることをさへ(を)もひつゝくれはさもあはれなりける身のありさま(な)てあつかひでしらぬさかひにもまとひ」(四十二)けるかなとそでのしからみどころせきまにはたゝはまをきの(を)りふしことにはなをよきさまのつゝきかすまへさせたまへかしと人しれすあふかれて思いてもなきみやこのなれとさゝかにのいとひさしくかきたえぬるはこゝろほそかりけることなれはくすのうらはの風になひくもめにとゝまりてさりとてやはとていそきたつをきゝてのになつしかのとまうさする人もなきにはあら」ねはいてやいつこにもつひのすみかならねはつりするあまのとさためかねてやすらはるゝほとにのこりすくなきみのありさまはたひのそらよはのけふりと私たちのほりなほあまのいさりひかとおほめかれん事ものつからあはれとはかりやつたへきかせたまはむとみつゝきのあとかきなかさ

ぬまゝにはこれにもつきぬ心ちするいふ(こ)さもたゝをしはからせ給へし」(四十二)

236

(338) とへかしたたまくしのはにみかゝれて もすのくさくきめちならずとも

(この歌詞書きより三字下げに筆写)

とありしかはかくなむつかひのたゝいまくたればとてとく／＼とせむるになに事もをもひもあへぬほとにてすなはちちはやふる神な月のついたちの日いろ／＼のことはみたまへはりぬるまことにみつかきのいとひさしくきこえさせてはへりけるかな花のみやこをふりすてゝすゝかやまこ」えさせたまひしにざりともしふく山の名たのみおも(ひ)まへしをかひなくなのみしてすぎ給にけりとうけたまはりてくちをしくてすきはへりしかとつひにはいせのうみのなみたちかへりたまはさらめやそのときにこそはほしあひのはまのまさこのかすをつくしておほつかなかりしほとと事をもきこえさせめひなかのいまのほとはかりたにたいめむせてやはとむらまつのはまをたの(ふ)てすぎ侍ほとに」(四十三)あはせてもたれそのもりのたれもいくわのゝ人をきくこともふちかたのかたくてなに事もいはてのことにてのみなむうきはしのをろかなるさまにおもはれたてまつりぬるかな

237

(339) しらすやはいせのはまをき風ふけは をりふしことにこひわたるとは

(この歌詞書きより三字下げに筆写)

あんのきたおもてにてほとゝき(す)はしめてきくといふ

たい又「こひ

238 (340) うのはなのかきねならずはほととぎす いつしかけぎのこ

(光)きかましや

239 (341) むさしのうけらかはなのいつとなく さきみたれたる恋も

するかな

院北面にて橋上藤花といふたいを

240 (342) うすくこくのとかにほへしつえまて ときはのはしにかゝ

るうのはなみ

郭公并恋人「よみしに」(四十四)

241 (343) いろならて身にしむものはほととぎす しのたのりのしの

ひねのこえ

242 (344) なつひきのいとしも人はしらしかし こゝろにかけてとしふ

るわれを

旅宿郭公并恋人「よみしに

243 (345) をりしまれしつ心なしほととぎす たひねのそらになくこえ

きけは

244 (346) かうちめかてそめのいとのみたれあひて よりあふへくもみ

えぬきみかな

かすみ

245 (347) ひはりあかるときにしなればよしの山 そこともみえずかす

みたなひく

歌合三首

246 (348) ほととぎすなけるわたりはせきなれや ゆきかふ人のすきか
てにする

347 (349) たねまきしわかなてしこの花さかり いくあさつゆのをきて

みつらん」(四十五)

348 (350) いたつらにはなのみさきてたまかつら みならぬこひもわれ

はするかな

前木工頭俊頼きみの七月廿三日なんいせへむすめをめて

くたり侍人のこになさんとてひとへにまればかまにまれ

ことさらにとてこひたりしかはひとへはかまなとしてつ

かはしゝにたもとにかきつけはへりしに

249 (351) ことしよりかさしにしむるをみなへし ちよの秋をはきみか

まに／＼

返し

250 (352) をみなへしうれしきなみたをきそへて つゆけかるへきたひ

のそらかな

皇后宮にて庚申夜晩風如秋并恋よみし

251 (353) ゆふされの風のけしきのすゝしさに しかなきぬへき心ちこ

そすれ」(四十六)

252 (354) いかにせんにぬしまもりかあさころも あさましきまであら

ぬきみかな

同夜又待草花并恋

253 (355) おもふとちつゆうちほらひみにゆかん 花のゝはきのはやも

さかなむ

254 (356) ますらをのゆみにきるてふつきの(を)の つきせぬ恋もわれ

はするかな

山影写水并恋

255 (367) かめやまのかけをひたして大井かは いくよまてにかとし
のへぬらん

256 (358) いかにせんしをれころもにあらねとも よことに人をかへす
きみかな
祝

257 (359) ふたはなるまつをひきうゑてたのむかな よろつよまてのか
さしと思へは
花橋薫御

258 (360) たちはなのをすのまとをしにをふかを たかふるそてとをも
ひけるかな
こひ(四十七)

259 (361) きみをこそをもひそめしかわかそての くれな(の)ふかくな
りもゆくかな
兵衛のかみのくら人の少将のみまさかのかみもとへわた
りによ(り)てとありしかは

260 (362) けふよりそいひそめかはの水きよみ ちよまてすまむなけれ
とおもへは
かへしみまさかのかみ(の)もとへ)とよりこひたりしか
は

261 (363) よろつよをいひそめかはの水なれば おなし心にすまさら
めやは
たなはたによせたるこひ

262 (364) ひこほしのおなし心にこひく^きて うらやまし(く)はこよ
ひなりけり

263 (365) やまさくらやへたつかすみみせすとも かせもへたつとおも
はましかは
あか月にうくひすをきくといふ題にておなしき院にて」
(四十八)よませられしに

264 (366) ゆめさめてこゑたてゝなくうくひすは よのまの風に花やち
るらん
永縁法印のたち花をゝこすとして

265 (367) きみかためはなたちはなをたをるとて やまほとゝきすひと
こゑそなく
返し

266 (368) いまよりもはなたち花をたをらなむ やまほとゝきすたえす
きくへく
一品経供養冬奥歌妙莊殿王品

267 (押紙) すゝめすはおやはやみにやまとはまし おもへはこゝそあは
れなりける
此歌不被書入随思出追所書入也

注(1) 「すく」の横に「こ」「て」が並べて傍書されており、
墨減されている。
(2) 「むるれ」と書。「れ」が墨減。
(3) 「まことに」と書。下の「まことに」が墨減。

〔付記〕 翻刻を許可された京都大学附属図書館、ならびに翻刻に
際し御教示を頂戴した橋本不美男・上野理岡先生に、深く
感謝申しあげます。